

竜の子 奨学生

TATSUNOKO NEWSLETTER

第8号
Jul.2011

その夢は、きっと世界を変えていく。



第15回交流会（第5回贈呈式・第4回卒業式）



ボランティア活動（宮城県女川町にて）

Contents

- | | | | |
|------------|------------------------------|-------------|-----------------------|
| P.2 | 一語一会「ふるさと」 | P.10 | 平成23年度在籍生近況報告 |
| P.3 | 財団活動報告 | P.12 | 被災地ボランティア活動報告 |
| P.4 | 第15回交流会レポート
(贈呈式・卒業式・祝賀会) | P.14 | 被災地ボランティアの同行レポート |
| P.8 | 平成23年度卒業生紹介 | P.15 | SPECIAL REPORTー北海道特集ー |
| P.9 | 平成23年度竜の子奨学生紹介 | P.16 | Topics／編集後記 |

「ふるさと」

作詞 / 高野 辰之

作曲 / 岡野 貞一

うさぎ 兔追いし かの山	い か 如何にいます 父母	こころざし 志を果たして
こぶな 小鮒釣りし かの川	つつが ともがき 恙無しや友垣	いつの日にか 帰らん
夢は今もめぐりて	雨に風につけても	山はあおき ふるさと
忘れがたき ふるさと	思い出する ふるさと	水は清き ふるさと

この歌は日本人が小学校で習う歌の中で、最も愛され親しまれている歌だろうと思います。歌詞の内容はおわかりになるように「ふるさと」を遠く離れ夢や志に向かい努力している人の心境を歌ったものであります。皆さんの事を歌にしたものと言えると思います。

私ごとですが、この「ふるさと」という歌を聞くにつけ、ふるさとの山や川や友人、知人、先生、両親の顔が思い出され18歳で東京都に出てきたときの初心に戻る事が出来るとても貴重な歌なんです。

秋元国際奨学財団の広報誌「竜の子」の執筆依頼を受けた時は、皆さんにこの歌を是非紹介したいと思った次第です。

皆さんは、遠い異国である日本に「青雲の志」を抱きやって来ました。それこそ冒険心とガッツに溢れた素晴らしい人たちです。しかし、様々な困難や辛い事があるはずで。時にはくじけそうな時もあると思います。そんな時はこの歌にあるとおり、ふるさととの山や川、父母の顔、友人達の顔を思い出して乗り越えてほしいと思います。

そしてこの歌の三番にあるように志を果たして、ふるさとに凱旋（がいせん）してほしいと思います。

皆さんが志を果たすことのお手伝いが秋元国際奨学財団の目的ですし、皆さんが志を果たされることは、この財団を創設した秋元竜弥氏の最大の喜びであると思います。是非に初期の志を忘れずにまい進してください。期待しています。

太田 孝昭

生年月日	昭和23年4月7日
最終学歴	中央大学商学部会計学科卒業
勤務先	OAG税理士法人
職歴	昭和63年3月 東京国税局調査一部退職
	昭和63年5月 税理士開業登録 太田税務会計事務所 (現：OAG税理士法人)開設 (株)シーケーシステム研究所設立 代表取締役就任
	平成3年11月 (株)ビジコム設立 代表取締役就任
	平成9年4月 社会福祉経営研究会 (現：総合福祉研究会)会長就任
	平成17年4月 (株)福祉総研を設立 代表取締役就任
	平成18年2月 電子決算公告株式会社 (現：株式会社あんてな)設立
	平成19年1月 OAG税理士法人設立 代表社員就任 現在に至る



「一語一会について」

竜の子奨学生にとって、財団関係者からの励ましの言葉は、大変貴重なものです。そして、竜の子奨学生には、その言葉は一生に一度の出会いであると心得て、そこから多くのことを学んでほしいという願いを込めて、このコーナーを「一語一会」と名付けました。

ご寄付いただいた皆さまへ

ご寄付を頂き、誠にありがとうございます。最近特に色々な事があり、「絆」「縁」という言葉を実感しています。今この時代に、日本で出会えたことが嬉しいのです。寄付者の方々がいてくださるおかげで勉強に集中できること、勉強だけではなく様々な機会を与えていただけること、本当に感謝しております。このように応援していただくことが、私達竜の子奨学生にとって大きな励みになります。将来的に自分の夢を叶えるというだけでなく、国と国との架け橋になり、ここでのご縁を大事にしていきたいです。竜の子奨学生の一員としての誇りを持ち、私もいつか皆様のように、人を助けてあげられる大きな人間になりたいので日々努力し続けます。どうか見守っててください。

(平成23年度竜の子奨学生 東京電機大学2年 マハルジャン スニル)

財団活動報告

平成23年3月26日～3月27日、中国にて開催された「日中友好の声 日本語中国語弁論大会」に主催者から招待され、参加して来ました。※弁論大会での理事長のスピーチの様子が北京放送、NHKにて放映されました。

「日中友好の声日本語中国語弁論大会」（主催・日中友好の声日本語中国語弁論大会実行委員会、主催事務局・東方通信社）が3月26日（第20回天津・北京首都圏大会）27日（第6回全国大会）に天津外国語大学で開催されました。

本大会は、天津市長から中国共産党政治局員、そして中央政府の全国政治協商会議主席を務めた李瑞環氏の支持を得て、1989年から開催されている、中国でもっとも歴史ある日本語弁論大会になります。2005年からは全国大会も開催し、本大会の入賞者達はその後、政府職員、学者・教員、日本企業のビジネスマンなどになり、日中の架け橋として活躍している方々ばかりのようです。

本大会ですが、今年は東日本大震災の直後ということもあり、震災関連を意識したものとなりました。

まず、両日共に、大会開始前には被災者に向けて黙祷が捧げられました。

そして、今回のテーマは「継続は力なり」。27日のスピーチの即席テーマとして「今般の原発事故に思うこれからのエネルギー問題」というものでした。

即席テーマとは、まさにその日、その場で弁士達に伝えられるものであり、テーマとして難しいのではないかと、どれだけ事情を把握できているのか？等と思いましたが、ほとんどの学生達は見事に原発事故に対する思いや考えを語り、「原発事故を繰り返さない為にも、中国ですすめられている原発開発をあらためて検討するべきではないか」といった提言まで飛び出すなど、中国人学生達がいかに福島原発問題に関心を持っているかをうかがわせました。

審査委員長を務めた金田一秀穂杏林大学外国語学部教授も「全体的にレベルが高いので驚いた。これ以上の上達を望むなら、じっくりと母国語の勉強をするのもいいでしょう。そうすれば自然と表現力が身に付くはずですよ」と講評し、弁士の実力を賞賛していました。

そんな激戦の末に全国大会で特賞を射止めたのは、天津外国語大学三年生の楊楽穎さん（21）でした。

日本への留学経験はないものの日本語、内容とも非常にレベルが高く「将来は日系企業で働いてみたい」と笑顔で喜びを語っていました。

翌日、主催者と応援団として参加した方々、そして優勝した楊楽穎さんを伴い在中華人民共和国日本国大使館を訪れ、丹羽宇一郎大使からは「日中の架け橋となる人材になってください」とねぎらいの一言がありました。

第一回大会が始まった頃から、中国は目覚ましい発展を遂げ、北京オリンピックや上海万博といった世界的なイベントを成功させてきました。そして、それに伴い日中関係は双方にとってますます重要なものになっています。

これからも本大会から日中の架け橋となる人材が生まれることを期待したいと思います。



楊さんと秋元理事長
(在日日本大使館内にて)

御見舞文

日本語教育学会をはじめ、関係者の各位の先生方々

3月11日の未曾有の東北地方太平洋沖地震災害と津波により、多くの人々が命を奪われ、家、財産が失われ、被害の状況が想像をはるかに超えたのみならず、原発の事故で、今も放射線汚染などで、人々の生活が脅かされつつあることを聞かされ、大変驚き、心痛の至りでございます。

中国日本語教学研究会および天津外国語大学を代表して、亡くなった方々に心からご冥福をお祈りし、日本の方々にお見舞い申し上げます。

中国日本語教学研究会も天津外国語大学も震災支援の募金活動を行っていますが、後日、中国駐在日大使館をはじめ、関係のルートで送らせていただきます。一日も早く立ち直り、正常な生活を取り戻すように心からのご支援を送りたいと思います。

日本人の精神と結束で、必ず、この災難を乗り越えられるだろうと強く信じています。どうかこの私たちの気持ちを日本の方々にお伝えください。

中国日本語教学研究会会長 天津外国語大学学長 修 剛

平成23年3月20日、新極真会の緑健児代表と秋元理事長が石川県金沢市にある児童養護施設「亨誠塾」を訪問しました。

平成23年3月20日、新極真会の緑健児代表と秋元理事長が石川県金沢市にある児童養護施設「亨誠塾」を訪問しました。「亨誠塾」では3歳から18歳の子供達約60名が生活しています。東日本大震災の直後だったこともあり、一時は訪問中止も考えましたが「子供達に元気を与えたい」との緑代表の一言で実現しました。子供達は元気よく空手を体験し、「最後まで飽きることなく物事に向き合っているのは初めて見た」と職員の方々も驚かされていました。「決してあきらめることなく、少しずつ努力を重ねていけば、必ず夢は叶います」

という緑代表の言葉に財団のキャッチフレーズである「その夢はきっと世界をかえていく」を重ね合わせた一日でした。



「亨誠塾」のみんなと緑代表を囲んで

第15回交流会レポート

● 第5回奨学金贈呈式 ●

平成23年3月9日（水）、ヒルトン東京にて第5回贈呈式が開催されました。第5期は13名の留学生たちが選ばれ、竜の子奨学生として迎え入れられました。秋元理事長や選考委員長の有山正孝氏から温かいお祝いの言葉をいただき、朴世熙さんが奨学生を代表して感謝と決意、目標となる夢を話してくれました。

式辞 秋元竜弥理事長

新たに奨学生として選ばれた皆さん、おめでとう。

本日ここに新たに5カ国、13名の優秀な留学生を、当財団の奨学生として迎え入れることができましたのは大変大きな喜びでございます。

当財団はこれまで11カ国、述べにして190名の留学生を竜の子奨学生として迎え入れてまいり、その一人一人、誰もが自分の夢に向かって、諦めずに日々努力をしております。

これまで、皆さんは、母国を離れ、たった1人この日本で努力されてきた中、辛いことばかりで「もう国に帰ってしまおうかな」と考えたこともあったでしょうが、今日からは違います。

今、周りをご覧ください。皆さんには、これだけの仲間・応援者がいます。

この他にも、沢山の皆さんが、皆を応援しています。

もし、何か壁に当たった時には、この仲間の顔を思い出し、自分は決して1人じゃないのだということを思い出してください。

そして、いつの日か、皆さんには、日本と母国との架け橋になってくれることを期待しております。



式辞を述べる秋元理事長

新入生代表挨拶 立命館大学 朴 世熙（韓国）

この度、竜の子奨学生となることができまして、私の心には喜びと感謝の気持ちでいっぱいです。皆様を代表して、心から感謝申し上げます。

今、私がここに立っているのは、親との『ある約束』があったからです。

私は、親から半年間だけ仕送りしてもらうことを約束し、日本へ留学することができました。

そのために1年生から奨学生になることを目指して、数多くの国際交流活動やバイトをしながらも勉学に目をそらさず、力を入れてきました。

その結果、現在はGPA4.88を維持しており、それができた理由は、韓国で私を応援している家族の事を考えながら、自分を励まし、頑張ったからこそできたと思っております。

私は今年で4年生になりますが、当財団の奨学生になることで、計画しておいた主に、3つの活動〈就職活動・国際交流ボランティア活動・卒業論文に関する研究活動〉にもっと深く取り組んで実践することができると思っております。また、今年はどうような国際交流企画を発案して参加できるのか本当に楽しみながら最後の4年生を過ごすことができるのではないかと期待しております。

最後に、『Let's get together!』というのが、私の生き方で大切にしていることです。

その為に、相手を理解し受け入れ、一緒に前向きに楽しむことを、重要にしております。

この生き方どおりに、私はこれからも他国の文化を学んで数多くの人と共有する課題認識とホスピタリティを含めたモノづくりを通して、自分が架け橋になり、他人に幸せを伝えたい夢を持ちながら、日本から世界を舞台にしてグローバル人材として活躍していきたいと思っております！

皆さん、一緒に頑張りましょう！

（担当：平成23年度竜の子奨学生 東京電機大学 マハルジャン スニル）



新入生を代表してスピーチする朴世熙さん

選考結果報告 有山正孝選考委員長

財団では、平成23年度13名の新しい奨学生の皆さんをお入れすることといたしまして、国内の大学に推薦を求めました結果、期日までに21の大学から42名の候補者のご推薦をいただきました。

その42名の中から、私達は予め定めた選考基準に基づいて、皆さんからいただいた申請書類を審査し、留学の目的、それから学業成績、経済状態、そういうことを慎重に検討いたしました。13名の方を、第5期の竜の子奨学生として選出いたしました。いずれも、非常に優秀な方々でありまして、この財団の目的に合う優れた奨学生だと思っております。新たに、竜の子奨学生になられた皆さん、本当におめでとうございます。



選考結果を報告する
有山選考委員長

● 第4回卒業式 ●

平成23年3月9日（水）、竜の子奨学生13名が財団を卒業する日を迎え、厳粛な中にも温かい雰囲気で行われました。卒業生は、男子は紋付で、女子は可愛く華やかな振り袖で式に参加し、深い感銘を受けた式となりました。

式辞 秋元竜弥理事長

卒業生の皆さん、卒業おめでとう。今までの卒業生の皆さんは、母国に帰って国の発展に尽力する人、日本に残り、企業に就職、あるいはさらに研究に励む人と、さまざまな分野にて大変ご活躍されていると聞きます。

皆さんは今日財団を卒業していきますが、これからが人生の

本当のスタートです。社会に出ると今までの大学生活とはまったく違う困難が立ちはだかることもあると思います。時には逃げ出したいと思うこともあるでしょう。そんな時はここにいる仲間を思い出してください。夢は願い続ければ叶うものです。決して諦めず、その夢が世界を変えるのだと強く思ってください。みなさんは非常にすばらしい夢を持って日本に留学されて

います。そして、今後つらい時はそれを思い出してください。
何時の日か世界との架け橋となることを祈っています。



卒業生にスピーチを贈る秋元理事長

在校生代表送辞 京都大学 何 玄悦 (中国)

私たちはそれぞれの国から日本へ留学に来ているわけですが、秋元国際奨学財団のおかげで、生活面ではあまり心配することもなく、学業に励むことが可能となり、また、交流会では秋元理事長をはじめとした財団関係者の皆様と寄付者の方々、同じ竜の子奨学生のみんなどの親睦を深め、日本の文化を体験することもできました。私は初めて生で面白いお笑いとお迫力のある空手の試合を見ることができました。皆様もそれぞれに心に深く残った思い出があるかと思います。

今年度も財団にお世話になる奨学生の一員として私は、学業や就職活動に力を入れ、いつかは財団に恩返しができるようになろうと、いつも思っております。

そして卒業生の皆様は、これからそれぞれに異なった道を歩んで行かれると思いますが、「その夢は、きっと世界を変えていく」という非常に力強いフレーズの如く、大きく羽ばたいていくことになると思います。

最後に、財団がこれからも大きく発展し、多くの留学生の支えとなることを願って、私からのご挨拶とさせていただきます。



在学生を代表してスピーチする何玄悦さん

卒業生代表挨拶 立命館大学 張 冲 (中国)

卒業生を代表してご挨拶をさせていただきます。本当は三年間の経験からたくさんのお話したいのですが、今日は三つのことについてお話をさせていただきます。

一つ目は成長についてです。

卒業生を代表して皆さんの前で、大声で「私たちは成長した」ということを宣言いたします。そして、それは財団のおかげです。「成長」の意味は、ただ成績がよくなったという事ではなく、生活していく上で日本文化を理解し、そして人格も成長したと自負しております。

二つ目は夢についてです。

僕は日本に来るまで、「日本留学を通じて自分を成功させよう」という夢を持っていました。しかし、この三年間、財団の皆さんと付き合うことによって僕の夢が変わりました。自分の成功よりも周りの人を幸せにする事、そして夢を持って世界で成功するというのが、今の僕の夢です。

三つ目は使命についてです。

今日という日は財団の卒業式であると同時に、私たちの新たな人生の第一歩ではないでしょうか。私たちの使命は夢を持って世界を変えていくことです。

竜の子奨学生の皆さん、竜の子奨学生としての誇りを持ってこれからも頑張っていきましょう。

今まで落ち込む度に何度も国に帰りたと思いました。そのたびに理事長や常務理事を始めとする財団関係者の皆様に支えて頂きました。本当にありがとうございます。

奨学生の皆を代表して、この場をお借りしてもう一度私たちの心の声を皆様にお伝えしたいと思います。今まで本当に、ありがとうございます。



卒業生を代表してスピーチする張冲さん

● 祝 賀 会 ●

贈呈式と卒業式の後に祝賀会が行われました。来賓の皆様方よりのこころ温まるご祝辞と感動的な卒業生の挨拶、そして卒業生より折り鶴と感謝の言葉を理事長に贈りました。最後には卒業生、在校生、新入生の皆で「その夢はきっと世界を変えていく」を合唱し、円満に会を終えました。

理事長挨拶

竜の子奨学生の皆さん、これだけ多くの方が皆さんのことを応援してくださっております。

皆様の夢を必ず実現し、将来世界の平和のためにそれぞれの分野で活躍してください。

祝辞 GMOペイメントゲートウェイ株式会社 代表取締役社長 相浦 一成 様

私には16歳の娘がいますが、イギリスに留学させています。親の気持ちとしては、毎日心配です。留学生の皆さんの親御さんの気持ちを考えると、たぶん毎日夜も眠れないぐらい心配しているのではないかと思います。皆さんが頑張れば誰が一番喜びますか。それは、ご両親なんです。それを胸に刻んで日本で精一杯努力してください。

皆さんの話を聞いていると「夢」という言葉がキーワードとして何度も出てきます。私の夢は禅宗の黄檗宗というお寺（1654年に中国から隠元禅師が持ってきた佐賀県にあるお



寺)を改装することです。改装するには多額のお金が必要です。もし、私の手でそのお寺の改装を行う事が出来たら、この世に生まれてきた使命が果たせると思います。とても大きな夢ですが、是非それを叶えたいと思っています。

最後に「夢」というキーワードで皆さんに贈る言葉を用意しました。

「夢ある人に目標あり、目標のある人に計画あり、計画のある人に行動あり、行動のある人に成果あり、成果のある人に自信あり、自信ある人に夢があり。」

皆さん、これからも頑張ってください。

祝辞と乾杯のご発声

NPO法人柔道教育ソリダリティー

理事長 山下 泰裕 様

今日、竜の子奨学生を卒業される皆さん、これからが本番です。これからも自信を持って力強く頑張ってくださいと思います。何時の日か、日本と母国との架け橋になっていただきたいです。そして、新し



い奨学生の皆さん、皆さんは財団から力強い支援を頂く事になったのですから、今後、存分に学力と人間力を磨き高めていってほしいと思います。

卒業生に送る言葉として、感謝のお話をしたいと思います。私は大変恵まれている人間です。実は、今もNPO法人を立ち上げており、昨年3月には中国の南京に日中友好のため南京柔道館を立ち上げました。いつも多くの方に支えられています。今から十年位前に、私のことをよく調べた人からインタビューを受けました。インタビューの最後に「山下さん、貴方は本当に運がいいですね。何で貴方はそんなに運がいいですか？」と質問されました。もちろん今までこんな質問を受けたことは一度もありませんでした。目を瞑って自分なりに答えを考えました。そこで思い浮かんだのは「感謝」、「ありがとう」という言葉です。私は、柔道の道を歩んでいますが、この道で成功するのは当然だと思った事はありません。常に自分が成長するためには大勢の方が手を貸してくれました。その方々に対しては常に「ありがとうございます」「感謝の気持ちを持って接するようにしていました。もしかしたらこれが良かったのではないかと思います。この質問を受けた日から私は変わりました。もし私が常に感謝の気持ちを持ち、驕らず、傲慢にならず、うぬぼれずに生きていたら、私の人生には運がついてきてくれるのではないかと思います。人間は、順調に物事がいっている時ほど、それが自分の力だと思いがちです。支えてくれるいろいろな人たちに「ありがとうございます」という感謝の気持ちを常に持つという事が、皆さんが今後、恵まれた人生を送っていくのに大切なことだと思います。最後になりますが、今後、たくさんの竜の子奨学生に恵まれた人生を送ってほしい、そして世界平和に貢献できる人間になって欲しいと思っています。

モルガン・スタンレーMUFG証券株式会社 調査統括本部 経済調査部長 ロバート・アラン・フェルドマン 様

竜の子奨学生の皆さん、日本によこそ。実は、私は40年前皆さんと同じように、日本に留学していました。



当時、私は16歳で、名古屋の南山高校男子部という所で勉強させていただきました。そこで、私の人生は本当に変わりました。皆さんも似たような経験がこれからあるかもしれませんが、ものすごい冒険です。人生が良くなるような冒険、世界に貢献できるような冒険だと私は思っています。留学してどういうことがあったかと言いますと、もちろん日本の知識が増えました。そして、母国アメリカについても知識が増えました。中でも一番知識が増えたのは、「自分とはどういう人間なのか」ということです。まず、個人としてはどういう人間なのかという事を知った上で人と接すると、人との関わりが深くなるというのが一つ大きなポイントではないかと思います。

また、相手を悪く思えなくなるという事も大事なポイントだと思います。なぜかと言うと、留学の経験があるからです。人間は、どの国でも同じ人間なのだという事を留学を通して学びました。人に対する偏見を持たなくなったという事は、留学から得た大きな宝物だと思っています。個人としての留学経験がどういうものかを考える事は、留学の一つのポイントだと思います。

もう一つ、世界との関わり、世界の市民としてどうすればいいのかというものもポイントになります。

すなわち、世界がどんどん小さくなって行く中において、

人間関係のネットワークを作るということは、平和を保つ為に非常に大事なことです。

これから起こる様々な事は、皆さんにとってどれも大変良い経験になるに違いないと思います。

そして、世界平和という目的を忘れず、たくさん友達を作って、様々な知識を増やし、世界平和に貢献していって頂きたいと思います。

株式会社 未来塾 代表取締役 岸野 一夫 様

私はイギリスから帰ってきて21歳で会社を創業しました。35年前のイギリスには日本にないようなことがたくさんありました。日本に帰ってきてから、21歳で海外からスポーツ用品を仕入れて国内で小売り販売する仕事を始めました。その後、25年間この仕事をしましたが、ものすごく奥の深い仕事でした。45歳になった時、気がついたことがありました。それは、欲をコントロールするという事は非常に難しいという事です。私は今までいろいろ失敗しました。その経験から若い社長に「ここは、これ以上伸ばすな」、「ここは、今伸ばすところだ」といような助言が出来たらということで、未来塾を始めました。私が接する経営者で、一番勉強させて頂いている方がケーズホールディングスの加藤会長です。加藤会長は「頑張らない経営」を信条としている事で有名です。これはかなり難しい事です。ケーズホールディングスには売上の目標がありません。お客さんには無理に売るなど言いながら、創業して45年がたっています。また「お客様に徹底的に親切しましょう」という事で、たとえ他の家電ショップで購入した物でも、無料で直しています。とにかく社員が一生懸命を働いていて、「親切にする」という事でお客さんを喜ばせているのです。こんな会社が本当に実在しているのです。私は若い社長達に、せっかく会社を作ったんだから、社員に生き生きと仕事をしてもらい、お客様が喜ぶことをやろうという目標をもって欲しいと思っています。



NPO法人全世界空手道連盟 新極真会 代表理事 緑 健児 様

私たち新極真会には世界79カ国に80,000名の会員がいます。新極真会には、故大山倍達総裁が残した「頭は低く目は高く、口謹んで心は広く、考を原点として他を益す」という言葉があります。これが極真の精神です。「頭は低く」とはいつも感謝の気持ちを持つこと、「目は高く」とは志は高く、夢を大きく持ちなさいということ、「口謹んで」とは人の悪口言わないこと、「心広く」とは大きな心を持って人を許してあげる気持ちを持つこと、「孝を原点として」とは親孝行しなさいということです。親孝行できない人間は、立派な人間にはなれない、強くなれない、チャンピオンになれない。そして、強くなったら社会に貢献しなさい、ということを伝えております。卒業生の皆さんはこれから社会人になって旅立っていきます。学生の時とは違って、楽しいこともたくさんあるのと同時に、つらいこともたくさんあります。皆さんには大勢の仲間がいます。つらいことがあった時には仲間のことを思い出して頑張ってもらいたいと思います。私が世界大会で戦った時に大山総裁から「死力達成」という言葉を頂きました。「死ぬ気になって頑張れば、死ぬ気になって練習すれば、夢



は必ず叶う」と意味のお言葉です。今も、そしてこれからも、この言葉を宝として人生を歩んでいきたいと思っています。最後になりますが、これからの長い人生、つらい時も秋元理事長を始め、財団の皆さんで支え合って、がんばっていきましょう。

日本和装ホールディングス株式会社

代表取締役 吉田 重久 様



竜の子奨学生の皆さん、今日は本当におめでとうございます。今日は着物についてお話をしたいと思います。今日、13名の卒業生の皆さんは着物を着ています。ご覧の通り、女性は振り袖、男性は紋付です。まず、女性の振り袖についてお話をさせていただきます。振り袖については、様々な説があります。振り袖というのは袖が下に長いです。ある一説ですが、日本の社会では、女性が自分から「I love you」なんてことは、言えませんでした、なので着物の袖を振って男性を自分に呼び寄せたと言われています。ただし、これは独身の頃の話で、結婚すると、その袖を切って、もう一生誰にも袖を振らないという事になります。今日は、結婚している方もいらっしゃるかと思いますが、特別に振り袖をご用意させていただきました。

次に男性の袴についてお話したいと思います。袴というのは、昔、日本人の男性が外出する時に必ずつけたものです。結婚する時には男性が女性に結納金を渡すと、お返しとして袴料をもらうという習慣があります。今日は、奨学生の皆さんはうちの先生に袴を着付けてもらったと思いますが、日本の習慣から言いますと、奥さんが着付けるという習慣があります。袴には、その家々の結び方があります。もし結び方が違っていたら外で何をしていたのかわからない、という事になってしまいます。

日本には、二千数百年続いた文化があります。私の視点で大変恐縮ですが、この二十年、日本は病んでいると思います。皆さんは、この病んでいる日本を2年間ぐらいご覧になっています。是非、これが日本の全てだと思わないで欲しいと思います。今後、十年、二十年先になるかもしれませんが、日本の伝統文化は必ず変わってくると思いますので、その時には、是非日本と母国との架け橋になってもらいたいと思います。

卒業生代表挨拶

名古屋大学 文 銀実



秋元国際奨学財団との出会いにより、私は人生の新たな転機を迎えることができました。学費の心配なく、安心して勉強に専念できただけでなく、毎年夏休みには計画通り海外調査に出かけることができました。一方、財団交流会では、素晴らしい伝統文化である日本の茶道、座禅、空手道に触れ合うことができ、心極め、人と人の絆を大切にする日本人の豊かな精神文化をより深く理解することができました。そして何よりも自分の人生観、価値観が大きく変わりました。交流会を通じて多くの方々に恵まれ、数多く心温まる励ましのお言葉をいただきました。その中で私は、夢をもって一生懸命頑張ればその夢はきっと叶えられる真理、多くの方々の支えの中で夢を実現していく幸せを、身を以て学ばせていただきました。

秋元理事長をはじめとする財団関係者の皆様、寄付者の皆様、私に夢を諦めず頑張れる大きな希望を与えてくださり、心より深く感謝しております。竜の子奨学生の誇りを忘れず、私が皆様からご支援を頂きましたように、私も多くの人々に夢と希望を与えられるよう、一生をかけて社会に貢献していくことをここで誓います。ありがとうございました！



財団の歌を歌う卒業生・在校生・新入生



卒業生から秋元理事長へお礼の気持ちを込めてプレゼント



お揃いの和服姿がカッコイイ卒業生



在籍生達はそれぞれの民族衣装を着装、大人気！



着物姿がお似合いの卒業生と加藤さん

(担当：平成20年度竜の子奨学生 慶応義塾大学 宋 寿蓮)

(写真：平成23年度竜の子奨学生 日本大学 曾 永宏)

平成23年度卒業生紹介「今、私にできること」



アンドリー セティアワン
インドネシア ジャワティムール州
群馬大学卒業

まずはじめに、お見舞いをさせていただきます。東北
大震災で、被災されたみなさまにお見舞いを心より
申し上げます。そんななか、私はIT企業に就職をし
ました。これから私ができることはなるべく早く技術を身に付けること
です。高い技術があれば、被災地の復興・復旧をIT基盤で支えていくこ
とができると思うからです。



楊 高郎 (ヤン ソルラン)
韓国 聞慶市
筑波大学卒業

みなさん、お久しぶりです。私は今年の3月、財
団の卒業式と同時に筑波大学大学院を卒業し、筑波
大学で特別研究員として働きながら、非常勤講師とし
て日本語と韓国語を教えています。3月11日の東日本大震災により、私
の暮らしている茨城県も大きな被害を受けました。まだ余震があり不安
な毎日が続いているのですが、動揺せず自分の仕事を淡々とやっていきたい
と思います。



劉 栄 (リウ エイ)
中国 福州市
日本大学卒業

応援してくれた家族、先生、秋元国際奨学財団、
友達、皆のおかげで今の私がいます。今まで皆に対
する感謝の気持ちはずっと心に思っていて、学校の勉強
に励んできました。これから社会に出て、日建設で働き、皆に「あり
がとう」と言う気持ちを実際の行動で表現していきます。社会に貢献
し、皆に恩返し出来るよう頑張ります。



岳 岡 (ガク オカ)
中国 上海市
亜細亜大学 アジア・国際経営戦略研究科
博士前期課程2年

私は日本に来てから、たくさん日本の方に支援し
ていただいたおかげで、順調に勉強することができ
ました。私が今できることは色々な交流活動に参加して中国人に日本の
文化と好さを伝えたいです。そして、中国の文化も日本の方に紹介した
いです。



劉 知凡 (リウ チボン)
中国 大連市
東京大学卒業

学生身分から卒業し、今私は日立製作所火力事業
所で働いています。地震と津波の影響で原子力発電
の未来が不明確になり、未だに増え続けている電気
の需要を満たすためには火力発電が絶対必要だと思います。今自分がで
きることはいち早くエンジニアとして必要な知識を学び、一人前の技術
者として、火力発電所の設計に携わって、日本再興のための力になるこ
とです。



陳 悦 (チン エツ)
中国 鎮江市
名古屋大学卒業

桜の季節に、私はわくわくしながら社会人生活を
迎えました。入社初日から想像以上に厳しい研修が
始まり、多忙な日々を過ごしています。今の私は、
一生懸命にビジネス知識を吸収しようとしています。一日でも早く一人
前のコンサルタントになり、日本企業のビジネス改革に力を尽くし、自
分の社会価値を実現したいです。また、東日本震災の打撃を受け、今の
日本が非常に大変な時期となっています。一日でも早く復興できるよう
に自分の微力を捧げたいと思います。



張 允禎 (チャン ユンジョン)
韓国 木浦市
立教大学 コミュニティ福祉学研究科
コミュニティ福祉学専攻博士課程2年

秋元国際奨学財団を卒業後、生活に大きな変化は
なく高齢者福祉現場で足を運びながら博士研究を進
んでいました。3月11日の東関東大震災後、5日目で韓国に帰り、1カ
月半くらいの間韓国の福祉現場をいくつか訪ねて日本に戻りました。日
本に戻ってからは地域福祉専門の先生らが中心になって、福祉現場の
人々と研究者先輩たちが自治的に行っている「震災復興にかかわる『私
的な研究会』」に参加し、被害地の情報を収集したりしながら今後の対
策を考えています。

5年半の日本での生活で感じたことより、震災後5日間で学んだこ
のほうが大きい気がします。今、私ができることは、人の幸せを研究す
る人として初心を忘れず、研究に専念し、人の悲しみや痛みにも真摯に取
り組むことであると思います。



文 銀実 (ブン ギンジツ)
中国 山東省
名古屋大学国際開発研究科
国際コミュニケーション専攻博士課程3年

「一日は短い単位的一生、一生は長い単位の日。
一日を一生の如く真剣に生き、一生を一日の如く気
楽に生きたい。」(岩淵克郎) 自分に与えられた毎日を一生懸命に生き、
時には息抜きをしながら一度きりの人生を楽しみたい。今、私にできる
ことは、自分の人生目標を見失わずに毎日を着実に、楽しく生きるこ
とである。



張 冲 (チョウ チュウ)
中国 浙江省
立命館大学政策科学研究科
政策科学専攻
博士課程3年

東日本で多くの人が命を失い、傷付き、家を失い、
今も苦しい思いをしています。竜の子奨学生として、宮城県女川町での
ボランティアを通じて、仲間の大切さと力強さを実感し、仲間と一緒に
持っている夢を実現するために、まさに有言実行の時が来ているのでは
ないかと思います。小さい行動が大きな意味をもつことと信じます。



崔 智雄 (チェ ジュン)
韓国 釜山市
立命館アジア太平洋大学卒業

皆様のおかげで、現在私は韓国の大信証券という
証券会社の企業分析部に就職し、韓国ソウルで働い
ております。私は日本へ留学し、秋元国際奨学財団
を含め、多くの方々にお世話になりました。韓国で困難に直面した隣国
である日本を応援しています。実際に地震直後、様々な支援団体が義援
金募金活動を行い、両親と私も、日本でいただいた有り難みを思いなが
ら、大きい金額ではありませんが募金活動に参加しました。一日も早く
災害地域が復旧して被災された方々に希望が訪れるよう、心よりお祈り
いたします。



ガンバートル エンフジャルガル
モンゴル ウランバートル市
立命館アジア太平洋大学卒業

元気であることです。今年に入社したばかりで、
プレッシャーもあり周りの期待に応えていない気が
して、落ち込んでいました。しかし被災地の皆さん
が私が想像もできないほど被害を受けても何倍も元気であったことを見
て、驚き、元気ではない自分が情けないと思いました。元気で、精一杯
頑張りたいという気持ちがあれば、自分が何か始めることができると思
います。

(担当：平成22年度竜の子奨学生 東京工業大学 王 悦来)

平成23年度新入生紹介「今、私にできること」



王 俊紅 (オウ シュンコウ)

中国 黒龍江省
北海道大学 教育学研究科 教育学専攻 博士後期課程3年
北海道大学での留学生生活は約5年間経ちました。札幌は故郷以外、一番長く生活した町で第二の故郷という存在です。日本の大地震に対して心より早く復興できるよう祈り、寄付や節電など自分ができることをします。今回震災の時、冷静な対応や助け合いなどの精神から学んだことは、将来母国で日本語教師として皆に伝えたいです。



金 恩河 (キム ウンハ)

韓国 蔚山市
筑波大学 人間総合科学研究科 生涯科学専攻 博士後期課程1年
私にできることは、とりあえず自分の研究を楽しくやっていくことです。今の研究を通して、聴覚障害者に役に立つ情報を提供することが留学の目的でもあります。それ以外も、留学生として色々な壁もありますが、挫折せずに頑張っていることから、周りの友達に勇気づけることもできると思います。これが今私にできることです。



王 皓 (オウコウ)

中国 遼寧省
東海大学 体育学部 武道学科2年
より本格的に柔道を学びたいとの一心で、中国から日本へ留学に来てから、勉強と練習、そして様々な大会への出場で、忙しくも充実した学校生活を過ごしています。4月13日、中国での全国大会で金メダルを取りました。今は、来年のロンドンオリンピックで柔道のメダルを取れるように、毎日朝の6時から夜の8時まで、授業の合間を縫って、一生懸命練習を積んでいます。人に勇気と希望を与えることができるような選手になれるように、これからも努力惜みず、頑張っていきます！



魏 登輝 (ギ トウキ)

中国 河南省
東京外国語大学 外国語学部 日本語課程3年
あの日には外国人の私が久しぶりに大きなショックを受けた。それは、空前の猛威を持つ天災の恐ろしさでもあり、私と変わらない生活を送っていた2万以上の尊い命が一瞬にして消えたという事実の残酷さでもあった。しかし、悲しみや怖がりを超えて考えると、今の苦境を乗り越えるには私を含めて社会全員が希望を持ち続けなければならないと思う。お互いを助け合い、お互いの力を信じあい、手をつないでがんばろう、ニッポン。



曾 永宏 (ソウ エイコウ)

台湾 台北市
日本大学 芸術学研究科 芸術専攻 博士後期課程2年
最初にこのたびの東日本大災害で被災された方々に哀悼の意を表します。私の留学目的は「高齢者のための街づくり」であり、被災地の復興に向けた再建への取り組みに現在研究中のものも含め、お役に立てるべく立案したいと考えております。今回の大地震は千年に一度ともいわれるぐらい大きなものでした。私の国台湾も地震国であり、こうした被害の現実について学術交流を活用して後輩達にもしっかりと学べる機会を作る橋渡ししたいと考えています。



朴 世熙 (パク セヒ)

韓国 ソウル市
立命館大学 経営学部 経営学科4年
後悔しないように今日、今、この瞬間に最大の力で頑張ることです。そのためには、自分は一人ではないことを信じ、前向きに人生の目標と熱情を持って行動するように心掛けています。そうすることにより、仲間とともに生きていける者になるその夢を実現させるのが今、私にできることです。



杜 銘雨 (ト メイユ)

中国 山東省
立命館APU アジア太平洋マネジメント学部
アジア太平洋マネジメント学科3年
大震災直後、被害地の人々のことが非常に心配で、被災地のために何かできることを考えたとき、まずAPU学生団体により募金活動に参加しました。そして 風評被害を少なくするために、最新情報を集め、海外にいる親族や知り合いに正確な情報を伝えようとしています。自分ができることはほんの少ししかありませんが、被災地の復興に力になりたいです。将来社会で優秀な人材として働くために、残りの大学生活で勉強と地域貢献活動をもっと頑張りたいと思います。



イスラム モハンマド ザヒドル

バングラデッシュ DHAKA
電気通信大学 情報理工学研究科 情報・通信工学専攻 修士課程2年
私は自然災害時に事前警報と人々の位置情報を知るためにシステムを作り、安心な社会の実現に貢献したいです。地震や津波があるときに、事前に知らせてくれるデバイスがあると少しでも準備ができ、たくさんの人々が助かると思います。そして、被災地では既存のコミュニケーションツールは当然使用できなくなります。したがって、瓦礫の中で行方不明者や死亡者を探すのは非常に大変で、家族から離れてバラバラの避難所に避難している人々に非常に不安が生じてしまいます。それに対して無線技術とネットワーク技術を使用して位置情報が分かるようなシステムを作ることによって、災害活動の支援と被害者を安心させることができると思います。



李 丞孝 (イ スンヒョウ)

韓国 ソウル市
東京芸術大学 音楽研究科 音楽文化学専攻 修士課程2年
ヒョウ君と言います。私は舞台芸術とフェスティバルについて研究をしています。大震災後、日本中の皆さんが大変な状況ですが、大変な時こそ芸術の意味があるのではないのでしょうか。僕が参加しているフェスティバル/トーキョーの色々な作品が人々に勇気付けたり考えさせたりすると思うので、作品と共に私も頑張りたいと思います。



マハルジャン スニル

ネパール KATHMANDU
東京電機大学 情報環境学部 情報環境学科2年
大震災の後で、今まで以上に考えました。人の為に何かしたくても、自分の事も大変で行動できなかったけれど、宮城県女川町にボランティア参加しました。力がないと思っていたけれど、人の為になる事をやらせていただけて、今の自分ができる事は、人助けのできる人間になる為に、勉強を頑張る事だと思いました。そして、今は私自身も助けてもらいながらですが、周りの人への気配り、節電、小さな事だとしても頑張っていきたいと思っています。



胡 思鳴 (コ シメイ)

中国 湖北省
一橋大学 言語社会研究科 言語社会学専攻 修士課程2年
先日みんなと一緒に被災地の女川町にボランティアへ行きました。被災地に着いた途端、目にした光景は衝撃的で、私は一時言葉にできませんでした。その後、避難所に入り、被災者と顔を合わせました。頑張っている人たちの笑顔を見て、私は涙が出るほど、感動しました。私はただ一人の留学生ですが、その時できることは被災者に暖かい食事を提供することでした。人間は自然災害の前で無力ですが、しかし、人間はお互いに思いやりがあり、お互いに励ましあうことによって強い力が生まれます。そして、自分たちの力で、自然災害にまげず、あらたに家を復興させます。私にできることは微力ですが、周りの方々に元気を与えることです。



張 進 (チョウ シン)

中国 江西省
名古屋大学 理学研究科 物質理学専攻 博士後期課程3年
観測史上最大の地震と巨大津波、そして原子力発電所放射能漏れ事故という未曾有の複合災害が発生してもう数ヶ月が経過しました。毎日日本の地震についてのニュースを見て、日本国中ならず世界中が心を痛めています。何か私にも出来ることがあるんじゃないかと毎日自問自答しています。微力ではありますが、まずは義援金の寄付をします。そしてまだ安否の確認が取れていない方々、心から無事を祈っています。個人からの物資の希望が出た際には何か力になればと思っています。東北の皆様には、一日でも早い復興と笑顔を取り戻せるよう、心よりお祈り申し上げます。

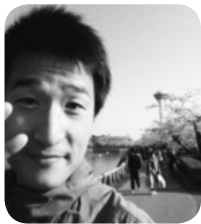


呂 思文 (ロ シブン)

中国 遼寧省
東京海洋大学 海洋科学部 食品生産科2年
東北大震災から1ヶ月後、被害が最も酷いところ「宮城県女川町」にボランティアを参加に行きました。その日、みんなと一緒にカレーライスを作って、自宅避難の人々に配りました。午後、その町の避難所に行くと、ちょうど新極真会の緑健児代表が子供たちに空手道を教えているところでした。子供たちが大声を出して、一生懸命練習する姿を見ると、「どんな困難に遭ってもあきらめず、勇気を出して、新しい未来に向けて頑張ります」という精神を感じました。震災で打撃を受けた東北の再建は難航していますが、日本に育てていただいた私も日本の友達と心をひとつにして、頑張りたいと思います。

(担当：平成22年度竜の子奨学生 東京工業大学 王 悦来)

電の子近況報告



イ ダイヨン
李 大英
(韓国 ソウル市)
北海道大学 水産学部3年

「暖かくなった函館」

皆さん、こんにちは。今年3年生で大変忙しい日々を過ごしています。月曜日から金曜日まで午前は講義、午後は実験という授業がビッシリとあるため、平日がものすごく早く過ぎ去るような気がします。今年のゴールデンウィークは函館で一番綺麗な五稜郭公園で花見やバーベキューなどをし、やっとここにも春が訪れたなあと思いました。



マ ヨウ
馬 ヨウ
(中国 大連市)
筑波大学 博士論文課程
人文社会科学部 文芸・言語専攻

「非常勤講師を始めました」

四月から中央学院大学で中国語の非常勤講師を始めました。授業日は週一回しかなく、最初はとても緊張していました。回数を重ねていくうちに少しずつ慣れてきたような気がします。教えることの難しさも痛感しています。授業の内容だけではなく、その科目の面白さまで伝えられるよう日々精進しております。



リン キリュウ
林 照龍
(中国 福清市)
電気通信大学
電気通信学部4年 情報工学科

「卒業研究の方向が決まりました」

4月から学部4年生になり、研究室の生活が始まりました。最近、卒業研究テーマについて指導教員の先生と相談したり、論文を読んだりしています。今はまだ具体的なテーマが決まっていますが、方向として「MPIにおける集団通信のチューニング」について研究していきたいと思います。この間、女川町にボランティアに行った時に、被災地の電気と水道は今でも非常に厳しい状況が分かりました。そのため、被災地から遠く離れる私たちにもできることはたくさんあります。まず、節電と節水をしましょう。



ソウ ショウレン
宋 寿蓮
(中国 佳木斯市)
慶應義塾大学 総合政策学部4年

「“まじゅりんこ”との深い絆」

私は千葉県四街道市にある“まじゅりんこ”という所で、ボランティアとして子供たちと一緒に田植えに参加してきました。大自然に囲まれた山の中で、苗を田んぼに植えるなどの単純作業でした。裸足で泥の中に入って、タニシや、オタマジャクシを見つけたり、「秋になったらおいしいお米ができますように」と願ったりしました。

また子供たちとあぜ道をおしゃべりしながら歩き、草の実を見つけて食べたり、草笛を鳴らしたり、新鮮な空気を吸い込んで元気を一杯いただきました。

今年の東日本大震災の後に、子供たちの元気な笑顔や姿を見られて安心したと同時に、日本の明るい将来を祈っている自分がありました。そういう意味では、自分にとって“まじゅりんこ”とは日本人や日本の文化を知る、自分の国の文化も相手に伝えられる交流の場になっていたことを実感し、お陰で大学での研究のほかにもこうして充実した日々を送ることができました。



ソン ビン
孫 敏華
(中国 天津市)
東京大学 博士課程4年
歴史系研究科 病因・病理学専攻

「東京大学中国人医薬学博士共進会を成立しました」

私は4月28日に第100回日本病理学会で「EBウイルス関連胃がんにおけるsox2とsox9のメチル化検討」を口頭発表しました。4月28日、29日は宮城県にボランティアに行ってきました。又、5月29日、東京大学医薬学博士共進会を成立しました。関東大地震について今、私にできることを言えば、節電に協力すること、後楽寮での募金活動を応援することです。



チェ ミン
崔 ミン
(韓国 富川市)
東京外国語大学
外国語学部4年生 日本語学科

「卒業まであと少し、頑張っています」

学部4年生にもなり、自分の研究や論文作成に向けて力を入れています。大学院への進学を考えているので、今年は勉強だけに専念しようと思っています。3月11日の大震災を乗り越えるために、自分は使わない服や靴、布団、そして食べ物を少し買い、被害地に送りました。お金を寄付するより、モノを送るのが、もっと被害者の方々の役に立つと思ったからです。



リ ハク
李 博
(中国 鞍山市)
東京海洋大学 博士後期課程3年
海洋科学技術研究科

「帰省しました」

私は震災後の5月2日に以前より決まっていた結婚式を挙げました。そして、現在博士論文に追われる日々を送っています。震災後、ボランティア活動にも参加できず、両親の圧力もあるのですが、地震直後に帰国した私が本当に恥ずかしく、情けないです。今、このような自分の弱さを自覚するのが今のやるべきことだと考えます。



ハン バンリン
班 バンリン
(中国 呼和浩特市)
東京芸術大学
博士後期課程3年 音楽研究科
音楽文化学・音楽音響創造専攻

「後楽寮での生活」

後楽寮は日中友好会館の別館のことを指し、「清」の時代から中国人留学生の宿舎として使われ、日中交流の1つ窓口となっている。建物は時代と共に変貌していくのだが、頑丈且つ素朴な環境が整っている。今年3月に私は寮の芸術楽団における芸術監督の仕事任せられ、入寮することとなり、合唱の指導や交流会に出演するなど尽力しております。自分の学習が生かされると共に、日中友好交流に貢献できたことが光栄に思う。



リ ケイホウ
李 慧芳
(中国 遼寧省)
東京工業大学 博士後期課程3年
総合理工学研究科 化学環境学

「傍にいる」

3月11日の巨大地震から数カ月が経ちました。最初に怖くて、不安を感じましたが、日本にいたので、みんなと一緒に乗り越えようと思って、ずっと日本で頑張っています。電力不足の今、節電して、震災前とほぼ同じ研究生活に戻っています。

地震直後、被災された方々を支援するため、研究室のみんなで募金を行いました。少額ではありますが、122,761円を日本赤十字社と中央共同募金会へ送りました。



オウ エツライ
王 悦来
(中国 河北省)
東京工業大学 修士課程1年
メカノマイクロ工学専攻

「小さい力を差し上げる」

私は卒業研究で些末電力の蓄積に関する研究を行いました。些末電力は非常に小さい電力ですが、効率よく蓄積できれば大きな電力となります。今私にできることは節電を率先し、呼び掛けを行っていることです。一人の節電は非常に小さいことですが、些末電力を蓄積するように、皆さんと力を合わせれば、大きな力になるでしょう。



キム ジウオン
金 智媛
(韓国 ソウル市)
一橋大学 修士課程2年
言語社会研究科 日本文化論専攻

「進学しました！」

今年博士後期過程に進学しました。今までできなかった勉強などをしながら少しゆったり過ごしています。また特に趣味としたものがなかった私に新しい趣味ができました。それはケーキ作りです。3月の震災のことで落ち込みがちですが、自分のやりたいことを積極的にしながら普段の生活を保つことが私にできることだと思います。



リ ソウシュン
李 双春
(中国 遼寧省)
東京電機大学 修士課程1年
応用微生物専攻

「卒業しました」

皆さん、ご無沙汰しております。お元気で過ごしているでしょうか。3月11日の地震は大きかったですね。地震後、竜の子家族の数人にメールや電話で安否確認をし、皆さんが無事で良かったです。

それから、大学の4年間学生生活を終えました、残念ながら地震の影響で卒業式はありませんでした。また、大学院生活があるので、その時の卒業式を楽しみにしています。



ヨウ シゴウ
楊 志剛
(中国 河北省)
日本大学 博士後期課程3年
薬学研究科・薬学専攻

「箱根へ行ったらよ」

現在、私は研究を進めながら論文も書いております。5月のゴールデンウィーク時、箱根へ行きました。今、自分ができることは、節電だと思います。一人で研究室にいる朝と夜の時間帯、電気を半分以上消すこと、また使わない機械の電源コードを抜くことです。最後に、日本は必ずこの大震災を乗り越えて元気になると思います。



カ ゲンエツ
何 玄悦
(中国 上海市)
京都大学 経済学部4年
経済学科

「就職活動継続中」

関東大地震の影響を受けて就職活動の期間が伸び、私は今も就活を行っています。このような時期に、募金を行う以外でできること、それは毎日を大切に無駄なく過ごし、有意義なものにすることだと思います。今日も太陽の光を浴びられることに感謝して精一杯生きたいです。



ベ ランジュ
裴 蘭珠
(韓国 慶尚南道巨済市)
京都大学 博士課程前期1年
地球動業学舎・
環境マネジメント専攻

「博士課程に進学しました」

2年間の修士課程を経て今年から博士課程に入りました。研究テーマである「バイオ燃料」が、原子力発電から起こる問題の解決に繋がればと思っています。現在修士論文を「国際公共経済学会」に投稿しており、6月には「国際公共財学会若手研究会」で発表させて頂くことになりました。



チュウ グ
張 愚
(中国 大原市)
九州大学博士課程2年
人文科学府 言語・文学専攻

「天神商店街でのボランティアいざ、出陣」

東大震災で直接の影響を受けていない私ですが、自分も何か出来ないかと、この3ヶ月で何度も考えたことがあります。無論、寄付を行う必要性は日々痛感していますが、それ以外に風評被害を助長しないように、東北産の果物を購入することとか、原発事故で過剰反応している母国の人々に、こちらの実情を伝えることも大事だと思います。



ユニアル プラストワ
YUNIAR PRASTAWA
(インドネシア・ジャカルタ市)
東海大学
政治経済学部 4年経営学科

「たすけあおう！ NIPPON」

東北大震災後、歌を通して日本のために何かできることないかと探す日々の中、祈っていました。そこで、私が通っているインターナショナル教会の友人からAmazonの義援金プロジェクトのオファーがありました。女優歌手「池田綾子」さんの「数え歌」を元に、「Counting Number Song」という英語版となり、レコーディングに足を踏み入れました。世界中力を合わせて、一つになろうというメッセージです。Amazonの中では「たすけあおうNippon」の義援金募集ダウンロードにこの歌を参加させて頂いています。収益は日米赤十字を通して、全額寄付されますので、是非参加してください。私達が今出来ること、それは少しの変化かもしれませんが、でもその変化が人々に、東北に希望を持たしめます。隔たりも何もありません。この地球は繋がっています。

[PV YouTube : KAZOE-UTA]



(担当：平成23年度竜の子奨学生 日本大学 曾 永宏)

被災地ボランティア活動報告

4月28日(木)深夜～30日(土) 早朝にかけて、財団関係者17名、竜の子奨学生23名、合わせて40名のボランティアが東日本大震災で被害の大きかった宮城県女川町へ炊き出しに行きました。奨学生からの日本の力になりたいという声から実現した今回の炊き出しが23年度の活動の第1回目となりました。

4月28日(木) 深夜～30日(土) 早朝にかけて、財団関係者17名、竜の子奨学生23名、合わせて40名のボランティアが東日本大震災で被害の大きかった宮城県女川町へ炊き出しに行きました。奨学生からの日本の力になりたいという声から実現した今回の炊き出しが、23年度の活動の第1回目となりました。

夜の23時に新宿を出発し、バスで女川町へ向かいました。まずは蓮田という場所で24時過ぎ、2回目は安達太良3時、最後の休憩は菅生という場所で4時30分と、3回の休憩を取り、6時過ぎに女川町浦宿の炊き出しの場となる水産工場跡地に到着しました。

着いてすぐに用意していたお揃いの秋元国際奨学財団Tシャツをみんなで着て、名札を背中に貼り、トラックから荷物を運び出して、炊き出しの準備を始め、みんなでおにぎり2つとお茶1本を朝食としていただきました。

私達の作る炊き出しのメニューはカレーで、母国のカレーは毎日作って食べていましたが、日本のカレーを、しかも1人2人分ではなくて1000人分を作るのも初めてでした。

漬物3種類の作業は1つの女性のグループに任せ、他のメンバーはみんなでカレーとご飯を作る作業を始めました。

ガスコンロと鍋12個を用意し、前日に切って用意していた野菜(ジャガイモ、ニンジン、玉ねぎ)と肉を鍋ごとに分けてパックのご飯を温め、鍋に入れ、カレー作りについて色々な意見が出て、先に肉を炒めて野菜を入れて作って行くのか、または、野菜と肉を一緒に入れて炒めるかという話になったけれど、結局両方の作り方でそれぞれ作っていました。自分たちの感覚で作っていたので、カレーのルーが足りなくなったり、多くなったりしていた為、味を調整する為に水や野菜を加えました。

ジャワカレーとインドカレーだけを作る予定でしたが、間違えて別のカレーのルーを混ぜてしまって、ミックスカ

レーになり、結果的に3種類のカレーになりました。甘口のジャワカレー、辛口のインドカレー、ミックスカレーは中間の辛さになったのでちょうど選べるようになりました。

その煮込んでいる間に順番で、車で5分くらいの場所に連れて行っていただき、ひどい津波被害の現状を皆が自分の目で見る事ができました。

カレーを盛る、漬物を入れる、お菓子を配る、お茶(玄米茶・緑茶)をいれるグループを決め、それ以外は、注文を聞いて配膳する係りでした。私は、お茶をいれてお渡しする係になりました。

予定通り、12時から炊き出しを始め、取りに来る地元の人々に大きい声で挨拶して、カレーの説明をしながら希望通りのカレーを提供しました。また、避難所の中に残っているお年寄りには、数人で届けました。炊き出しのカレーを喜んでいただき、感謝の言葉も頂戴いたしました。

15時からはバスでさらに移動し、1200人ぐらいの方々が避難している女川町総合体育館へ炊き出しに行き、同じくボランティアに来ていた新極真会と合流して、「負けじ魂 NEVER EVER GIVE UP JAPAN」Tシャツに着替え、緑会長と避難所のたくさんの子供たちで揃ってやる空手を見学しました。終了後に緑さんは、「1人ではない、長期的に応援していく。」と力強くお話されておりました。

また、秋元国際奨学財団として、女川町の震災対策本部を通じて女川町の小学生全員に配布されるよう、ノート(2400冊)、鉛筆(4800本)、消しゴム(800個)、鉛筆削り(800個)を寄贈いたしました。

夕方から、体育館前のテントでカレーやお菓子を配っていたところ、急に雨が降り出したので対応に追われましたが、無事17時30分に炊き出しを無事終了できて、ボランティアのみんなで美味しいカレーを食べました。食事後、荷物をトラックに載せて19時頃に女川町を離れ東京方面に出発、深夜2時過ぎに新宿へ着き、みんなで片づけをしました。東京の近くに住んでいる学生はタクシーで帰り、私も含め他の学生は新宿駅の近くにある喫茶店でお茶をし、始発電車で帰りました。



カレーを作る秋元理事長と竜の子奨学生



女川町総合体育館での炊き出し後、新極真会と一緒に

(担当：平成23年度竜の子奨学生 東京電機大学 マハルジャン スニル)

被災地ボランティア活動を終えて

● 初めてのボランティア ●

平成23年度竜の子奨学生
マハルジャン スニル (ネパール)
東京電機大学

ボランティアの経験は今までなく、財団初の活動ということもあり、緊張しながら向かいました。

女川町は、言葉で表わせない状態でした。海のない国から来たので、津波がとても身近に、怖く思いました。被害者の立場に置いて考えたら、怖い夢を見ているようでした。それを見て、涙が出ましたが、感情を顔に出さず、強くなり皆と一緒に頑張ろうと決意しました。

怖い夢のままに終われば良いですが、被災者の方にとってそれは現実で、そんな中で、復興に向けて生きている姿を目の当たりにし、感動しました。

いつも人のことを助けたいと思っていて、大震災の後に動きたく思っても、今の時点で当財団に助けていただいている自分1人だけの力では何もできませんでした。

心の中で考えるだけでは誰の助けにもなりません、行動するチャンスをいただけて、とても嬉しかったです。

今、1人1人の力が大切なので、世界中の人が一緒になって行動をすれば、世の中ではできない事は何も無いと思います。皆で助けあうことが大事だと実感しました。

私は決して1人じゃない、みんなの力があれば何でもできるということを秋元国際奨学財団の家族が証明してくれました。

このボランティア後、私も人生に自信を持つようになりました。成長できたと思います。

被災地の方々は、今この瞬間も復興に向けて頑張っているのだから、私もこの経験を忘れず、今後も被災した方々について考え、節電等できる限りの努力をしていきたいです。

● 心遣いを女川町へ ●

平成20年度竜の子奨学生
ソウ シュウレン
宋 寿蓮 (中国)
慶應義塾大学

バスで女川町に入り、目の前で現れたのは壊れた数多くの建物そのものでした。被災地の状況はテレビの画面で見えてもこれほど酷いものだとは思えず、倒壊している家を目の前で見ると恐ろしくて涙が出ました。ライフラインが途絶え、不便な生活を多くの人々がされていて本当に大変なことになってしまったと初めて肌で実感しました。一番印象に残ったのは、被災者1200人ぐらい避難している体育館を訪ね、カレーを配りながら、子供たちにはお菓子や文房具を届けた時のことです。雨の中にもかかわらず、小さい子供達が一斉に走ってきて、文房具をもらったら可愛い笑顔で満足した表情を見せてくれました。ある子供が全身濡れていることに気づき、お菓子を渡したあと、自分は思わずハンカチで子供の髪の毛を拭きました。一瞬戸惑った子供が「ありがとう」と小さい声で言ってくれました。こんな小さい子供にはなぜ地震や津波の怖さを経験しなければいけないか、誰も悪くないのにと思うと不思議な気持ちでした。お手伝いをするのはよいことですが、被災者の方々に気を遣わせてはいけないとその時に思いました。

「個人として何かできることがないか」と地震の後にずっと考えました。この度、奨学生みんなで少しでもお手伝いできて、本当に良い体験ができました。また、社会人の方々と奨学生やOBなど多くの人と色々な話ができてよかったです。最後になりましたが、活動にあたりお世話になった方々に感謝し、被災地の復興を心よりお祈りします。



女川町総合体育館グラウンドにて
(左がマハルジャン スニル/右が宋寿蓮)

「被災地ボランティアの同行を終えて」

「こんど当財団で被災地に行って炊き出しするんですよ！」

いつも陽気な財団のとある理事に話をおうかがいしたのは出発日の6日前だった。元々今回の震災で何か力になりたいと考えていた私は、とっさに「何人で行くんですか？ 準備とかはどうするんですか？」と矢継ぎ早に質問を繰り返したように記憶している。

その6日後の朝、私は新大久保で秋元理事長と席を並べて玉ネギを剥いていた。3人の学生、主婦の方2人、理事長、財団関係者、私の計8人で1,000人前のカレー具材の下処理である。当然、涙するものも多かったが、私と理事長は平気だった（目が細いからかな？）。

深夜になって参加者40名が集まり新宿を出発したが、明け方バスの揺れで目が覚めた。そこは石巻市内で、道が冠水したり割れていたりで、まともに走れないのである。竜の子奨学生達は、そこで初めて被災地の現実を目の当たりにしたのだろう。シャッターを切るもの、目を背けるのもの様々な反応があった。

早朝に女川町に着くと炊き出しの準備を始めた。私は仕事柄、奨学生らの様子を収めなかったので写真を撮りながら準備に参加した。GWとはいえ寒風の中、4時間近く準備していたが皆、精力的だ。

お昼頃になると自宅避難の近所の人たちが、ある人はお鍋片手に来てくださった。400人分は出たでしょうか？

途中、5人分を頼んだ主婦の方が容器を持ちきれず、韓国からの留学生李君とご自宅まで一緒に持っていくことにした。玄関先で受け渡しが進んだあと、おもむろに15年くらい前の家族写真を拝見することとなった。このうち4人が流されたそうで、李君も私もそのお話を真剣に聞いたが、この方は聞いてもらえたこと、隣にいた娘さんも

（韓流にはまっており）嬉しかったのだろう。笑顔が絶えなかったことを覚えている。

その後バス移動で、一番被害の大きい女川の被災地を通り抜けていくのだが、感受性の強い奨学生などは、涙しているものも見受けられた。竜の子奨学生から見た被災地はどのように映ったのだろうか？



女川町(人口約1万)の中心部。バスの中から撮影

夕方からは女川町総合体育館に移動して新極真会と合流し、1,200人近く避難されている前で炊き出しと、お菓子・文具の配布を行った。



疲れも見せず精力的にカレーを配る竜の子奨学生

このとき予想外の夕立があり、雨に濡れるのを嫌ってか館内放送をしても年配の方々はなかなか出ていられなかったので、モンゴルからの留学生ガンバートルさんを捕まえて一緒に体育館の中に入って、お菓子を配ることにした。一軒一軒、体育館の中に出て来た居住スペースを、腰をかがめて回っていると、いろんな声が聞こえてくる。大半は感謝なのだが、中にはメニューに対するご意見も頂戴した。この経験は貴重なので、2週目3週目か

らは中国の留学生王さんに引き継いだ。彼女が戻ってきてから感想を聞くと、「中に入ってみないと分からないことがたくさんあった。」と興奮気味に言い、貴重な体験が出来たようだった。

竜の子奨学生と今回のボランティアを同行して感じたのは、皆、被災者のために一生懸命に頑張るということ、寡黙であるということだ。当然、作業中などにi-phoneを取り出してツイートするものなど居ない。

とにかく、日本の学生と比べてしまうのは私自身がそういう年齢になったのか半分諦めているのですが、果たして比べてどうだろうか？

思うに、彼・彼女らは祖国を離れて日本に来て勉強し、「高い志・行動力」を持ち合わせているので、目的意識がはっきりした際の集中力、勤勉さは日本の一般学生では恐らく及ばないであろう。

「健全な精神は健全な肉体に宿る」という言葉があるが、今回見ていると「高い志には崇高な精神が宿る」という感じがしてならない。武士道にも通じる、その崇高な精神。「日本人であること」とは、そのような崇高な精神を持つ、又は持ちたいと願うことだろうと思っていたが、その実、竜の子奨学生のほうがずっと真の日本人らしいのであると大いに勉強させられた。

後から聞けば、竜の子奨学生たちは震災後も全員日本に留まっているというから納得だ。

最後に、今回このような機会を与えてくださった、理事長はじめ財団関係者様、寄付者の皆様、奨学生の皆さんにこの場を借りて御礼申し上げます。帰りの静かなバスの中、奨学生達の寝顔には充実感が満ち溢れていたことを補足しておきたい。

株式会社OKIプロサーブ
デザイン事業部 プロモーション部
チーフプランナー 岡 章元
(本会報誌編集者兼、当財団Webサイト制作ディレクター)

SPECIAL REPORT —北海道特集—

● ボランティア活動 ●

子供の頃、日本のアニメや映画が好きだったので大学では日本語を専攻しました。

日本語を勉強すればするほど日本の文化に興味を持ち始めていたところ、大学2年生の時に交換留学生として北海道教育大学に1年間留学する機会を得られました。

北海道の人々の親切さや朗らかな性格のおかげで私はとても楽しく充実した留学生生活を過ごすことが出来たうえ、日本の社会習慣や伝統文化などについて教科書以上のことを体験することができました。大学を卒業したらまた北海道に戻って研究を続けようと決心しました。

2007年、私は憧れていた北海道大学の修士課程に入学しました。その際、指導教官から「日本の社会や日本の文化をより良く知りたいならば日本社会の一員として色々な社会活動に参加した方が良い」というアドバイスをいただきました。その後、私は勉強しながら学内の交流会に参加したり学外の社会活動にも積極的に参加しました。社会活動の中で、ある機会に札幌商工会議所の観光ボランティアガイドの10数人が自主的に運営している「中国語勉強会」の講師としてボランティア活動に参加することになりました。この勉強会の発足のきっかけは「観光」を一つの産業と捉えている「北海道」に来る中国人観光客が近年飛躍的に増えていることがあり、特に北海道の雄大な風景を背景にして撮影された中国映画『非誠勿擾』（英文名：『If You Are The One』）が中国で上映されて以来、中国人の北海道旅行がブームになり、市内を歩いていると中国人の観光客に出会う事がごく普通のことになりました。勉強会の受講者の多くが定年退職をした方たちで、彼らは中国から来た観光客に中身の濃い充実した旅行になるためのお手伝いをしたいという気持ちで自主的に中国語を勉強し、ボランティア活動を行っています。私はその精神に共感し、皆と一緒にボランティア活動をし始めました。そこで、私は中国語や中国文化や中国現代事情を皆にご紹介し、

受講されている方たちからは日本語や日本の文化などを教えていただきます。このことにより留学生活がとても楽しく、続けるうちに知識も豊富になってきました。勉強会に参加されている方たちは毎週1回、中国語の学習を行い、ほかの日には札幌市内の文化財である赤レンガ庁舎や商店街の「狸小路」など市内の数か所ある各観光スポットでボランティア活動をしています。私は時間に余裕があり、受講者が観光スポットにいる時は一緒にボランティア活動に参加し、そこで受講者の方たちから建物の歴史や展示品の由来などの説明を受け、また彼らが中国人観光客に対する案内で困った時は私も中国語で彼らのサポートをします。相互で勉強するうちにお互いの国の文化や習慣などがより広く深く理解でき、ボランティア活動がよりよく面白くなりました。また毎年2月に行われる札幌の冬の一大イベント「さっぽろ雪祭り」が始まる前の日に私たちは雪祭りを見学し、雪像の名前や観光客に提供する施設や色々な情報などについての案内を中国語で説明できるように事前準備をしています。雪祭り期間中、札幌を訪れる観光客に便利さや満足感を提供するために皆と一緒に活躍しています。

時間が経つのは早いもので、あっという間に北海道に来て5年間も過ごすことになります。中国語勉強会でのボランティア活動も4年余り続けることができました。私にとって留学生活の中のとても重要な部分であり、中国語勉強会の受講者たちは私の日本の家族です。皆から日本のことを色々学び、彼らのボランティアの精神にも感動しています。他人を助けたら自分が楽しくなり充実感も得られる事を実感しました。私が将来、日本語教師として日本語や日本文化などを教えるだけではなく、日本で体験したいいろいろなことも中国の若者に伝えたいとともに勉強会の受講者たちのように日中間の友好の架け橋になりたいと思います。



雪祭り前日の見学会（雪像は中国の天壇）



中国語勉強会の受講の様子



狸小路で中国語通訳のボランティア活動

当財団HPからも寄付ができるようになりました。



この度、当財団ではGMOペイメントゲートウェイ（株）様のご協力により寄付者の皆様用のオンライン決済システムを導入いたしました。

これは写真にありますとおり、財団HPのTOP画面右側の「ご寄付のお願い」ボタンをクリックしていただくだけです。

皆様からの温かいご支援をお待ちしております。

URL：http://www.tatsunoko.jp/

また、財団でFacebookを始めました。

下記の財団の歌「その夢はきっと世界を変えていく」はFacebook又は財団HPでも聴くことが出来ます。

目指すところはレディ・ガガさんに歌ってもらうことです。

編集後記

委員長 東京電機大学 マハルジャン スニル

会報「竜の子奨学生」第8号の編集委員長を担当させていただきました。「贈呈式」・「ボランティアの記事」を担当しました。この度、色々な事が勉強になりました。分からない事が沢山あってどうしようと思った時に編集委員の皆が助けてくれたことで、皆を知って仲良くなれて、とても良い経験になりました。皆でやれば何でも可能という事を実感しました。こういう機会を下さった秋元国際奨学財団にいつも感謝しています。ありがとうございます。編集委員の皆さんお疲れ様でした。

副委員長 慶応義塾大学 宋 寿蓮

3ヶ月の間に、企画会社のプロの方のお力を借りながら、編集委員みんな協力あって、学校では学べないことをたくさん経験しました。私は主に、卒業式と祝賀会の部分を担当させていただきました。卒業式で非常に感動する場面や祝賀会で財団関係者の方々の言葉をビデオで振り返りながら、当時の思い出を励まされました。最初編集副委員長を引き受ける時に、卒業論文を書かないといけない時期でもあったため迷いもありましたが、参加して大変に良かったと思います。この場をお借りして、近況報告を投稿してくれた竜の子奨学生の皆さん、編集委員会の皆さん、そして何よりどんなことがあっても応援してくださっている財団関係者の皆様と、この貴重な経験を提供して頂いた財団や財団関係者の方々に感謝のお礼を伝えたいと思います。本当にありがとうございました。

委員 日本大学大学院 曾 永宏

まず「竜の子奨学生」会報の編集委員に参加させて頂き、皆さまに感謝いたします。「在籍生近況報告」、「第15回交流会写真デザイン」の部分を担当し、在籍生たちとメールや電話で連絡する機会が増えました。さらに編集委員との会議でいろんな意見交換をし、関係が深くなりました。留学のために日本へきて学校以外の新しい友人が出来てとても嬉しいです。特に、皆さんと一緒にやった編集作業の過程で築いた関わりは自分にとって良い勉強になりました。反省点で考えられるのは、時間を守れないと周りの人に迷惑をおかしてしまうということです。皆さん、いろいろとありがとうございました。

委員 東京工業大学大学院 王 悦来

「竜の子奨学生」第8号編集委員の一員として、「新入生及び卒業生紹介」の部分を担当させていただきました。皆さんと協力し合って、円満に会報誌を作り上げることができて、何より嬉しいです。

今回の会報誌編集をきっかけで、今まで一回しか会ったことのない新入生達とメールのやり取りで、皆さんとの距離が縮まったと嬉しく思っています。皆さんのご協力のおかげで、私が担当する部分が順調に完成できました、心から感謝します。そして、会報誌編集を通して、私はチームワークの大切さを感じました。自分が担当している部分だけ進むのではなく、チームの仲間と連絡を取りながら、全体で進むことがよりいい仕事できると実感しました。ここで、ご指導くださった財団の方々をはじめ、編集委員の皆さんにも感謝します。

編集委員をやって、本当にかけがえのない経験となりました。これから、今回の貴重な経験を活かして、研究や就職を積極的に頑張っていきたいと思っています。

委員 北海道大学大学院 王 俊紅

今回、第8号の「竜の子奨学生」会報の編集委員を担当させていただきました。北海道から東京まで遠いので、皆さんのおかげで私は北海道でSKYPEを通して編集会議に参加することができました。皆さんと助け合いながら素晴らしい体験をしました。貴重な経験は一生の思い出になります。奨学生の皆さんの楽しい思い出をたくさん収録し、会報を完成させるのは何より嬉しいことです。会報を楽しんでね！



第1回編集会議の様子

第3回編集会議の後で



「その夢はきっと世界を変えていく」

夢 希望をかなえる為 僕たちは生きている
その夢はきっと世界を変えていく 平和のため
いろんな事があるけれども どんなときでも

作詞：竜の子奨学生

作曲：班 文林（平成21年竜の子奨学生）

仲間とともに乗り越えて 竜の子の誇りを胸に
夢 希望をかなえる為 みんなは生きている
その夢はきっと世界を変えていく かならず